

柴田翔「ロクタル管の話」論

——象徴としての「虚像」について——

はじめに

「ロクタル管の話」は、一九六〇年に同人雑誌『象』三号（一九六〇年七月）への発表後、翌年の『文学界』一〇月号に転載された柴田翔の短編小説である。柴田の代表作「されど われらが日々——」の前に書かれた処女作であることから、「されど」と類似のテーマを含んだ作品として、研究もこれらの点を中心になされてきた。

その一方で、作品が語り手「ぼく」による過去語りの構成をしていることの分析、ロクタル管とそれを破壊する意味や戦後間もない時期を舞台としている点についての研究は十分ではない。「ぼく」の挫折についての分析が作品内にとどまっている点についても同様で、同時代の状況や作品内容の深い分析については研究の余地が残されている。「ぼく」による語りを通じて読者が作

豊島綾乃

品を読む以上、ロクタル管が「ぼく」や読者にとって何だったのか、という問いも見逃してはならないはずである。

以上の点を踏まえ、本稿では、作品を単なる少年のロクタル管喪失物語と位置づけることはせず、同時代の状況を分析しロクタル管を破壊する論理について検討していく。そして、ロクタル管が「虚像」であることの意味を明らかにすることで、「ぼく」や読者にとってロクタル管とは何だったかを探っていきたい。

第一章 「虚像」の美

ここでは、作中において、ロクタル管の美が「虚像」と表現される点に注目し、「ぼく」の考える美の本質について考察する。

「ぼく」はラジオの組み立てに用いる真空管、とりわけロクタル管に強い憧れを抱いている。ロクタル管は中学生には到底手が出ない代物であったが、露店街で偶然ロクタル管に出会い、それ

に触れるだけで「ぼくら」は十分に幸福だった。ロクタル管を使って作ることのできる回路やその性能を夢に描き、それが中学生には実現できないと知っているために、「限らない憧れ」を抱くのである。

「ぼくら」にとって、ラジオを組み立てる作業は、自分たちの住んでいる世界とは別の世界を自らの手で作り出す体験であった。ただしその世界は「幻想」であり、実際に「ぼくら」がその世界を目にすることはできない。

このように、「ぼくら」が「ロクタル管」に惹きつけられているのは、ただ「ロクタル管」そのものが美しいからというだけではない。「ロクタル管」が作り出す複雑な電気現象の「世界で起きることが、それは非常に正確である」という確実性と、その世界が「決してぼくらの眼に見えることはないのだという」断絶性が、「ぼくら」に強い憧れを抱かせていたのだ。

ロクタル管のこのような美を「ぼく」は「虚像」と表現し、「その虚像を通して、ぼくらの憧れが指向していたのは、あの、ぼくらが見ることなく信じうる、曖昧さの全くない、確定的な正確さを持った電気現象の世界だった」と語る。ロクタル管の背後にある世界は「ぼくら」の憧れによって作り出された幻想であって、ロクタル管そのものは、確実な電気世界を体現する装置ではない。それゆえ、その美しさは「虚像」なのである。しかし、そうであるにもかかわらず、そのロクタル管の世界の絶対性を疑いなく信じる「ぼくら」の態度によって、ロクタル管の確固たる

世界の存在は裏打ちされていたのだ。

「ぼくら」は自分たちの部に女の子を入れたがらないが、それは「ぼくら」が女の子を「美しさの具現者」、自分たちを美しさの「追求者」と位置付け明確に区別しているからである。「ぼくら」にとって「美しさ」は憧れであると同時に畏怖の対象であり、そして、決して触れてはならない、隔絶されていなければならない世界なのである。

同様に、「ぼくら」は先生に借りた高価なおシロスコープを前に、「俺だつてナァ、今におシロを作るんだ」と息巻いているが、「ぼくらはそれがいつか現実に出れることと信じてそう言ったのではないかった」という。

あの頃のぼくらは、頭でどう考え、口でどう言ったにせよ、まだ心のどこか片隅では、自分が今しているような生活は永遠に続くのだという、あの幸福な幻想をそっとはぐくんでいたし、また一方ではそれに絶望してもいたので、誰か他人が、ぼくらのやがては学校を出、社会人となって、おシロを作るための金位は自由に出来る日が来るのだよと言ったとしたら、自分らだつて口では「今におシロを作るんだ」と言っているくせに、ポカンとその人の顔を見上げてしまったに違いないのだ。

「ぼくら」は、自分たちがいつかは大人になるということを現

実としてとらえていない。子供の時間が永遠に続くという幻想を夢見ている。「子供らしい陽気な心」、「特別子供っぽい連中の集り」のような表現は、「ぼくら」が子供であることをしきりに強調する。彼らにとって大人になることは、真空管やオシロスコープのような、自分たちが憧れ、しかしなかなか手に入れないものを所有できるようになることを意味する。だが、真空管の向こうにある美しい世界は、対価を支払えば手に入るという性質のものではない。「ぼくら」にとつての真の美しさとは絶対的なものだから、金銭による価値判断を排除した世界にしか存在しない。「ぼくら」が「子供」であることを願うのは、ロクトル管の世界が手の届かない憧れの世界であつてほしいからであり、所有、つまり支配の対象となつてしまつてはならないからであつた。真空管の美の本質は、こうした絶対的な世界と自分たちとを乖離させようとする「ぼくら」の心理に依拠したものだといえる。

第二章 真空管／ロクトル管を破壊すること

ロクトル管は「ぼくら」ラジオ少年にとつて絶対的な存在であつた。ところが、作品には、その真空管を破壊することに言及した場面が二度、描かれている。ここでは真空管を破壊する論理を明らかにし、憧れの真空管を破壊するという矛盾した行為に対する解釈を試みたい。

第一節 一度目の描写

「ぼくらの仲間の一人」はある日、組み上げたラジオのセットを不具合のために破壊したことを告白する。それを聞いた「ぼくら」は、「ぼくらの憧れる世界がその確かな在り方で現われないという、本当に純粋な怒り」によつて受信機を蹴飛ばし、「自分らの不純さ」とは対照的な位置にいるその仲間を称賛する。しかし、実際に彼が蹴飛ばしたのは、真空管やバリコンなど大方の部品が取り外された受信機であり、それを知つた「ぼくら」は、今度は彼を嘲笑する立場に回るのだつた。

このように、「ぼくら」は真空管の世界に憧れを抱いているが、同時に、その世界を自ら破壊することを勇敢な行為と捉えている。だから、真空管が粉々になることを恐れて無難な部品だけを蹴飛ばした仲間は当然、意気地なしと見なされるのだ。

これを踏まえると、絶対的な世界を真空管が生み出せなくなつたとき、「本当に純粋な怒り」が「ぼくら」を真空管の破壊へと導くといえる。すなわち、真空管の絶対性が何らかの理由で脅かされるとき、真空管を破壊する論理が働くのである。

だが、「ぼくら」は誰ひとりとして真空管を破壊することができない。真空管は憧れの世界を作り出すための装置であつて、それを破壊するということは、「ぼくら」の夢を破壊してしまう行為に等しいからだ。

それでは、仲間の一人がラジオ部品のほとんどを破壊し得なかつたのは、それらが壊れてしまうことを恐れたから、ただそれだ

けの理由なのか。そうではなくて、「ぼくら」は自分たちの作り出す世界を絶対的なものと信じて疑わないが、他方で、その世界が虚構であることにもうすうす気付いていたのではないか。その証左として、「ぼくら」は「配線の向う側の世界」の正確さを「見ぬままに信じている」という。白石が指摘するように、「現実にはロクタルに限らず電気の世界はバラツキと妥協の世界である」(白石一美「柴田翔・ロクタル考」『宮崎大学教育文化学部紀要』第14号 宮崎大学教育文化学部、二〇〇六年三月)。電気現象の存在を客観的に示す「測定器」は、それ自身が「回路の純粋性をこわしてしまふ」ために、「ぼく」は「信じる」というきわめて主観的かつ曖昧な態度でしか真空管に関わることができない。科学的アプローチによって本当に正確な電気の世界を証明することを、「ぼく」は拒否しているのだ。

結局、「ぼくら」が本当に恐れていたのは、真空管の世界が虚構であることが疑いようのない事実として眼前に突き付けられてしまうことだった。真空管を破壊すれば、真空管が作り出す世界が完全ではないことを認める他なくなってしまうからだ。「ぼくら」のラジオ仲間が真空管を破壊できなかったのは、まさに真空管の絶対性・純粋性を守ろうとする態度の現れであった。だが、このことは、虚構の世界の存在を信じようとする「ぼくら」の「自己欺瞞」の態度に他ならない。「ぼくら」は真空管を絶対視することで、その欺瞞さえも覆い隠してしまおうとしていたのである。

第二節 二度目の描写

以上、「ぼくら」の真空管に対する態度のなかに、真空管の絶対性への懷疑とそれを消し去ろうとする欺瞞の態度が含まれていることを指摘してきた。次に、作品の後半部、手に入れたロクタル管がガラクタと化し、それを破壊したのかどうか語り手の「ぼく」がわからないでいるという点について検討していく。

「ぼく」は偶然、格安で売られているロクタル管を手に入れることに成功する。だが、注意してそれを眺めてみると、そのガラスの表面に一本の亀裂を発見する。微かな傷ではあるが、回路を作るといふ観点から見れば致命的である。使い物にならない、言い換えれば、回路の向こうの電気世界を創造できなくなってしまうという事実は、「ぼく」に憧れの世界の喪失を宣告している。店員とのやり取りの末に代金の半額とキズもののロクタル管と一緒に受け取ることになったが、「ぼく」は、「この上なく惨めな存在」になり果てたそれを再び眺めようとはしなかった。

回想はここで幕を閉じ、語り手は「果たしてそうだったのだろうか」と懷疑の念をにじませる。そして、その夏の記憶は「虚の心象」であり、「ポケットの惨めに空しき残骸と化したロクタル管を握りしめたぼくの左手は、何ものへとも知れぬ怒りのためにわなわたとふるえ、遂にはそれを道路に叩きつけたのではなかったか」と自らに問いかける。

真空管を破壊することは、前述のように、「ぼくら」にとつて一大事であった。ロクタル管を破壊したのであれば、それは強烈

な思ひ出として「ぼく」の記憶に染みついているはずだ。しかし、実際には過去の記憶は曖昧で特定は不可能である。二つの曖昧な記憶は、作品においていかなる役割を担っているのか。

当初の回想では、ロクトル管を破壊できなかった「ぼく」の様子が示される。「美しいロクトル管をぼくが今持っているということは疑ってはならないことなのだ」と自分を納得させるように、ロクトル管の幻想を信じ込もうと躍起になる。傷ついたロクトル管によって真空管世界の無謬性が崩壊しても、それを信じまいとしたために、およそ一〇年を経てもなお「ぼく」はロクトル管の幻にとらわれ続けているのだ。

一方で、ロクトル管を破壊し得た過去の存在も示唆される。絶対的な存在であるはずのロクトル管がガラクタになり果てた結果、「ぼく」は破壊の論理に従って、「何ものへとも知れぬ怒り」とともにロクトル管を道路に叩きつける。ロクトル管を破壊することで、その虚構性をも打ち砕いてしまうのである。真空管の破壊は、真空管が電気現象の世界を生み出せないことへの怒りであるとともに、その世界が虚構であることを自認する行為でもあった。破壊することによってロクトル管に寄せた「ぼく」の夢が潰え、かわりに、現実を見据える眼差しが生まれてきたといえる。

もしも本当にロクトル管を破壊し得た過去があったのなら、語り手の「ぼく」はこれほどまでに過去にこだわるであろうか。二つの曖昧な記憶の存在は、「ぼく」がどちらの道をも選択できず、そして、どちらの道を選んだとしてもロクトル管の幻想にとらわ

れ続けることを意味しているのである。

第三章 象徴としてのロクトル管

ロクトル管は傷一つつくともガラクタ同然になってしまう、脆く危うい存在として描かれていた。看過してはならないのは、「ぼく」の目を通してこのロクトル管を見ているのは他でもない我々読者だという点である。作品発表時において、また現代において、我々はロクトル管に何を読みとることができるのか。ロクトル管にとらわれ続けるとは一体どういうことなのか。本章では、ロクトル管が「虚像」であることの象徴性について考察する。

第一節 語り手の視座

「ロクトル管の話」は、大きく分けて前半部と後半部から成っている。どちらも「ぼく」が語り手であるが、ラジオ仲間との思ひ出を語る前半部では複数形の「ぼくら」が多用されている。「ぼくら」が「ぼく」とラジオ仲間を指していることは明白だが、同時代の状況を考慮すれば、より広義に解釈できるはずだ。例えば、冒頭で「ぼく」は「ねえ、君」と呼びかけているため、読み手はまるで「ぼく」と親しい距離にあるものと錯覚するように配置される。回想とともに読者の視線は「ぼく」の眼差しに包摂され、過去へと誘われる。我々の視線が「ぼく」によって物語のなかにとらえられたとき、「ぼくら」は同時代の人々、つまり、作

品が書かれた当時を生きた人々といえる。作品が発表されたのが一九六〇年、つまり語り手の「ぼく」がいる時代と同じだからである。

「ぼく」は一九五〇年時点で中学三年生であることから、柴田の年譜とはほぼ重なる。高史明の指摘によれば、彼らは「自分自身を育ててきた価値観が、ぼかっと崩壊してしまうという歴史的条件に遭遇した」^①世代だ。真空管という絶対的な存在への渴望が醸成される素地が「ぼくら」にあった所以といえるだろう。

語り手の「ぼく」が一九五八～五九年頃にいるとすると、そこから一九五〇年を振り返ることの意義とは何か。柴田は五〇年代後半の時期を「戦後の安定期」^②ととらえる。戦後直後の混乱からある程度立ち直り、「二種の安定に辿りついた」清水幾太郎「安保の日誌『諸君！』一九七五年六月」^③のがこの頃の社会の空気があった。

一方で一九五〇年かというと、作品でも触れられる通り、六月には朝鮮戦争が起こっている。この戦争を皮切りにして、「次ぎの大戦は、もしそれが来るとすれば、その瞬間までに人類を襲うかも知れない一切の惨禍中最大のものとなるであろう」(バートランド・ラッセル「第三次大戦は不可避か」『世界』一九五〇年一二月)という指摘のように、第三次世界大戦の勃発を危惧する議論が噴出した。柴田は後にこの時期を回想し、次のように述べている。

朝鮮戦争も一進一退で、日本まで波及するかもしれない。日本の社会の先行きは不透明で、どのような社会ができるのか、そして、その中で、人々がどのように生きていくのか、それを一人一人が考えざるをえない時代でした^④

社会の形が未だ定まっておらず、再び戦争が身近なものになる可能性が現実としてあって、その中で人々が自ら生き方を選択しなければならぬのがこの時代であった。

選択の必要に迫られていたのは、国家もまた同様であった。一九五〇年はちょうど連合国軍による占領期のさなかにあたる。豊下植彦が「約七年におよぶ連合国(事実上はアメリカ)の対日占領は、現代日本社会の枠組をつくる出発点であった」^⑤と言及するように、占領は後の時代にも大きく影響を残す出来事であった。

作中、「ぼく」は朝鮮半島で戦争が起こっていることを認識しながらも、自分がその戦争に巻き込まれるかもしれない現実より、戦争が真空管市場に与える影響にばかり関心を持っていた。同様に、当時は朝鮮戦争に無関心な層が多く、戦争が敗戦直後の日本にとって経済力回復の契機となることの方が重要視されていた。朝鮮戦争による米軍の特需は、敗戦によって疲弊した日本経済を蘇らせることになったが、それが朝鮮半島での数百万人もの犠牲の結果を伴うものであったことは日本ではほとんど知られていなかった^⑥。権赫泰・車承棋が「日本の「戦後」は「朝鮮」の消去の上にある」^⑦と喝破するように、戦後社会の発展の裏には、忘

却されてきた歴史が存在する。

また占領軍は当初、対日政策として「非軍事化」と「民主化」をすすめていたが、それが「日本の復興と再軍備」へと方針転換した大きな転機こそ朝鮮戦争の勃発であった。占領軍の要請により「警察予備隊」(「警察力増強を指令」『朝日新聞』一九五〇年七月九日)が設置され、日本は再軍備へと舵を切っていく。植村が「平和も国家としての常識も、朝鮮戦争によって揺さぶられ、試されることになった」^⑧と述べるように、朝鮮戦争は単なる隣国の戦争ではなく、日本にとって、戦後社会を築く上で重大な問いかけを持った出来事だったといえる。そのような側面があることを無視して、戦後社会を「安定と平和の時代」とみなすことは果たして欺瞞でないといえるのか。

一九五二年に日本は独立を果たすが、講和条約とともに結ばれた日米安全保障条約は、「駐留軍」としてアメリカ軍を引き続き日本に置くことを規定したものであった。ジョン・ダワーが「独立国というのは名目だけであり、ほかのすべてにおいて、日本は合衆国の保護国 a client state であった」と述べるように、戦後の日本社会がアメリカとともにあったことは重要である。

第二節 ロクタル管の背後にあるもの

ロクタル管は真空管の一種で、真空管ラジオの製作に用いられた。「米国で開発されたのが大戦直前で、いわば戦中派のタマですが、製造法のノー・ハウが伝えられなかったため」(浅野勇

『統魅惑の真空管アンブ…その歴史・設計・製作』誠文堂新光社、一九七五年)、日本ではついに生産されなかった。国内に売っていたロクタル管は、「ぼく」が手にしたものも含め、ほとんどがアメリカ製だったといえる。ロクタル管に限らず、「我が国の一般受信用真空管は殆んど全部といつてよい位米国の真空管の模倣」(科学技術編集部編『真空管』春陽堂、一九四八年)であった。「ぼくら」が強い憧れを寄せる真空管の背後には、つまり、アメリカの存在が指摘できるのである。

戦後、アメリカは日本人の羨望の的であった。西川長夫が「戦後われわれ日本人の目に映った欧米近代社会、とりわけアメリカは何よりもまず〈富〉のシンボルであ」ったと述べるように、アメリカは、敗戦当時の日本にとって物質的豊かさの象徴であった。

「ぼく」が組み立てたラジオから聞こえてきたのは、「遙か彼方の異国から遠い空をわたってやって来た」ジャズ、「早口の外国語」のニュースであり、これらは米軍放送 (AFRS: Armed Forces Radio Service) であると推定できる。『20世紀放送史 上』(日本放送協会編集・発行、二〇〇一年)によると、AFRS 局はGHQ によって国内駐留米軍のために設置され、東京をはじめ全国に展開していた。同書には「AFRS 放送は明らかに、受信できるうえ、テンポのいい英語のアナウンスとジャズは日本人の間にも、熱心なリスナーを生んだ」とあり、「ぼく」の聞いた番組の内容と類似している。

結論

以上のことをふまえると、「ぼく」が無邪気にロクタル管に憧れるという構図、そしてラジオというメディアの背後には、戦後のアメリカの存在と、それへの憧れのまなざしが内在していると読める。

「ぼく」が憧れを寄せたロクタル管の美は、その実態は存在しない「虚像」であったが、同様に、戦後社会も決して完全なものではない。確固たる世界の存在を見ぬままに信じ、絶対的な存在へと押し上げる「ぼくら」の自己欺瞞の態度は、戦後を形作るさまざまな暗部を、そうとは気づいていながら直視しようとしないう態度へと繋がっていく。

語り手の「ぼく」は、「自己欺瞞に崩れようとしている」と自称するように、自身に対して否定的な評価を下す。「アノトキノオマエハドオシタカ」と繰り返される問いは重い足かせとなつて「ぼく」を幻想の世界にとらえ続けるが、「ぼく」と視点を共有する我々読者にも、その問いは痛烈に投げかけられる。過去への視点の移動によつて、読者は五〇年代初めの、自ら生き方を選択していかなければならなかつた時代・社会を見つめなおす。戦後社会を構成するあらゆる矛盾と向き合うとき、我々は「平和国家」という神話を形成する認識基盤そのものを問い直す必要があるだろう。

完全な電気の世界を生み出せない、という「最も純粋な怒り」が、「ぼくら」の真空管を破壊する論理であつた。「ぼくら」は真空管の幻想に浸ることのできる世界が絶対的でないことを覆い隠し、いつまでもその幻想を守ろうとしていた。語り手の「ぼく」は過去を振り返り、ありえたであろう二つの過去を提示するが、それらはどちらも、ロクタル管の幻想にとらわれ続ける「ぼく」の姿を映し出すだけであつた。

果たして「ぼく」はどちらの道を歩んだのか、作品で明らかにされることはない。どちらにせよ、ロクタル管の無謬性に疑いが生じてしまったときから「ぼく」はそれを受け入れようとせず、「自己欺瞞」という言葉が如実に示すように、自分を騙しながら生きていく。

三章で明らかにしたように、「ぼく」が切実に憧れていたのはアメリカ製の真空管であつた。我々が五〇年代を見つめなおすとき、巨視的にとらえるならば、ロクタル管は戦後社会の象徴であり、ロクタル管の破壊に象徴されるのは、戦後社会の欺瞞を問う姿勢である。六〇年代の「安定期」にいた読者は、戦後混乱期にあつた五〇年代を見つめなおす。我々読者は、それらの時代を包括した戦後という時代を見つめなおす。追ひ求めたものは何だったのか、たどりついた先には何があつたのか。それは我々の視点語り手の「ぼく」とともにあるから問うことができるのだ。口

クタル管という「虚像」を通して我々が一九五〇年代の社会を見るとき、「戦後社会」が実際には完全ではないことはもはや自明であるだろう。憧れのロクタル管を手にした途端にその世界が崩壊する、それは、敗戦を経て平和を築こうと歩んできたはずの戦後社会が、その背後にさまざまな矛盾を抱えていたことを露呈するプロセスでもある。

現在に生きる我々にとつての「ロクタル管」とは何か。その崇高さに憧れ、手にしたいと願うが、実は虚構である、そういうものがありはしないか。「ロクタル管」という理想を追い求めるうちに、自らに都合の良い神話を作り出してはいないか。「ぼく」と共に過去を振り返った我々はいま、戦後というきわめて不確かな枠組みを、その先にある現在を、改めて問い直す必要に迫られている。

付記

本稿では、初版での誤りが訂正された初刊『されど われらが日々——』（文藝春秋新社、一九六四年）所収の本文を用いた。初出から初刊、再刊にわたって、誤記の訂正や語句の書き換えなど幾度かの改変が行われているが、全て作品の内容に大きくかわるものではないと判断したためである（柴田翔「本文庫版のテキストについて」『されど われらが日々——』（文藝春秋、一九七四年）を参照）。資料・文献の引用に際して、旧字は新字に改めている。

注

- (1) 江口幹、岡庭昇、高史明、塩見鮮一郎、白川正芳、柴田翔、真継伸彦「人間として」を論ずる」（『人間として』第二巻 筑摩書房、一九七二年二月）
- (2) 岡庭昇、小田実、中村真一郎、柴田翔、野間宏、真継伸彦「戦後文学が担うもの」（『人間として』第五巻 筑摩書房、一九七一年三月）
- (3) 「柴田翔インタビュー『されど われらが日々——』とその時代」（『中央公論』二〇〇八年二月）
- (4) 歴史学研究会編『日本同時代史2 占領政策の転換と講和』青木書店、一九九〇年
- (5) 「もし朝鮮事変起らざりせば、一年半か二年先きに招来したであろう経済的位置を、事変のために一ヶ月かそこらで得た」（野田豊「特需景気の齎すもの」『文芸春秋』一九五〇年九月）、「これは日本経済にとつては終戦後の一つのエポック・メイキングだと思う」（堀越禎三「世界的軍拡と日本経済」『中央公論』一九五一年二月）などとあるように、経済界でも朝鮮戦争による特需の恩恵を受けての発言が確認できる。
- (6) 八柏龍紀「占領政策の転換」（『戦後史を歩く——明日』という時代への架け橋 情況出版 一九九九年）を参照。
- (7) 権赫泰・車承棋編『戦後』の誕生——戦後日本と「朝鮮」の境界（中野宣子訳、新泉社、二〇一七年）を参照。

両氏は日本の植民地支配に言及し、「日本が植民地と占領地の抵抗によってではなく、アメリカを中心とした連合国の武力によって戦争に負けたことで、「戦後」日本とアジア周辺諸国とがねじれた関係を持つようにな」つたと述べる。

- (8) 植村秀樹『戦後』と安保の六十年』（日本経済評論社、二〇一三年）を参照。米占領軍の初期の対日政策については、「降伏後ニ於ケル米国ノ初期ノ対日方針」（外務省特別資料部編集『日本占領及管理重要文書集 第一卷基本篇』東洋経済新報社、一九四九年五月）を参照。

- (9) 植村秀樹『戦後』と安保の六十年』（前掲）

- (10) 中野敏男は「平和主義」は、サンフランシスコ平和条約による講和と同時につくられた日米安保体制とセットになつており、その安保体制は日本を高性能な「基地国家」にしている」ことを指摘している（『戦後日本』に抗する戦後思想——その生成と挫折」前掲）。つまり、講和条約による日本の独立は完全な「独立」でなかったことを示唆している。

- (11) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて（下）』三浦陽一、高杉忠明、田代泰子訳 岩波書店、二〇〇一年

- (12) 西川長夫『日本の戦後小説』岩波書店、一九八八年
(とよしま・あやの 二〇一七年度本学卒業生)